

日本語学会第 145 回大会  
発表要旨  
The 145<sup>th</sup> Meeting of LSJ  
Kyushu University, 24-25 November 2012  
Abstracts of oral presentations, workshops and poster presentations

<<口頭発表 Oral presentations>> (2012年11月24日)

【A会場】司会：(前半)玉岡賀津雄，窪菌晴夫 (後半)本間猛

[A-1]

形容詞の獲得における事物の典型的な属性と非典型的な属性の区別  
朴 備俔，小泉 政利

子どもが新しい形容詞の意味を獲得する際、比較対象になる事物が存在する場合のほうが、そうでない場合に比べて、獲得が容易になることが知られている。しかし、比較対象になる事物がない環境でも形容詞の意味が獲得される場合もある。そこで本研究では、事物が1つだけ提示されて比較ができない環境で、子どもが新しい形容詞をどのような意味をもつものとして捉えるのかを調べた。韓国語母語話者の3歳・4歳児を対象に、「未知の形容詞は事物の典型的な属性ではなく非典型的な属性を表す」と考えるバイアス（非典型性バイアス）が働くかどうかを実験によって検証した。その結果、3歳児には非典型性なバイアスが働くが、4歳児には働かないことが判明した。これは、形容詞獲得の初期段階の子どもが形容詞の意味として事物の非典型的な属性を選ぶバイアスを持つことを示唆する。

[A-2]

日本語を母語とする子供の語彙使役と統語使役の習得について

山腰京子・三浦香織・山崎香緒里

本発表では日本語を母語とする子供の使役文の習得に関する実験の報告を行う。日本語には語彙使役と統語使役という範疇がある (Kuroda 1965, Shibatani 1972, Kuno 1973, Miyagawa 1989; 1999, Harley 2008)。語彙使役は使役形態素 *-(s)ase* と語幹動詞が非弁別的であり、統語使役は *-(s)ase* と語幹動詞が弁別的である。また、語彙使役は被使役者 (causee) が使役動詞の目的語として解釈され (i.e. 直接使役)、統語使役は当該の名詞句が補文の主語として解釈される (i.e. 間接使役)。日本語を母語とする子供の語彙使役と統語使役の使い分けに関する実験をおこなったところ、被験者の子供は6歳台においても使い分けを確立していないことが明らかになった。この結果は、子供は統語使役よりも語彙使役を先に獲得するという Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007) の自然発話観察に基づく仮説を支持する。本発表では Harley (2008) の使役の派生モデルに基づき、上記の結果から子供は6歳台でも *-(s)ase* と *vP* フェーズの併合を十分に習得していないことを提案する。

[A-3]

母音に関する音韻素性間の非対称性

大沼 仁美

母音の分節内表示を |A|、|I|、|U| という 3 つの音韻的最小単位で表す多くの理論では、いずれの素性も原則的に他の素性と同様の振る舞いをすると考えられ、|I| と |U| に対する |A| の特異性を形式的に論じているものは非常に少ない。そこで本発表では、分節内表示における |A| の特異性を構造的に捉えるモデルの可能性を探る。

具体的には、様々な言語の母音体系における |A| の分布を観察し、|A| は他の 2 つに比べて母音の対立を産出する際に欠かすことのできない基本的な特性である、ということ論じる。また、母音調和などの音韻現象においても、|A| が現象の生起に大きく関わっていることを示す。その後、Schane (1984) や van der Hulst (1988) など |A| の特異性を構造上表したいくつかの理論を比較し、それらの理論的妥当性を論じる。

[A-4]

The role of the “basic variant” in subsidiary stress assignment for words with variant stress patterns

LIU Sha

This paper examines the subsidiary stress assignment rule for words with variant stress patterns in British English within the framework of Positional Function Theory (PFT, hereafter), where the subsidiary stress rule is composed of 16 “Positional Functions”. The paper shows all variants of a word are closely related; I hence propose one stress pattern is the “basic variant” of one word and all other patterns, “derived variants”, are obtained by making adjustments to the basic variant. The subsidiary stresses of the basic variant of a word are given by PFT, without any optional Functions or lexical treatment. The paper further demonstrates all derived variants as well as basic variants of all examples can be obtained with the help of PFT.

[A-5]

単純語を基体として持つ短縮語形成と韻律構造

橋本 大樹

短縮という語形成は、基体の一部を削除することで新しい語を作る語形成である。例えば、「ビルディング」という基体の一部を削除することで、「ビル」という短縮語が形成される。本研究は、日本語において単純語 (simple word) を基体 (base word) として持つ短縮語の長さ (基体のどの部分までを残すことで短縮語を形成しているのか) がどのようなメカニズムによって決定されているのかについて明らかにするものである。

本研究では、先行研究である Labrone (2002) や窪菌 (2010) で指摘されている様に、短縮語形成は韻律構造に基づいて行われている語形成 (Prosodic Morphology) の 1 つであると考えられる。そのため、まず先行研究を踏まえながら日本語の韻律構造 (Ft, Colon 等) について明らかにする。その上で、短縮語形成は基体の持つ韻律構造のうち韻律語以下で初めに分岐する韻律範疇に言及することで短縮語形成が行われていることを主張する。

[A-6]

カクチケル語における韻律境界標識と音韻構造

那須川 訓也, 八杉 佳穂, 小泉 政利

音節よりも大きな韻律領域 (フット等) において、領域を構成している主要部と依存子間の方向性 (線形化特性) はパラメタ化され、通常、左側主要部構造が無標で、右側主要部構造は有標とみなされている。他方、音節内構造は、普遍的に、核 (主要部) が頭子音 (依存子) に後続する (CV) という右側主要部構造を呈すると考えられてきた。しかし、カクチケル語 (マヤ語キチエ語族) の韻律境界標識の分布および強勢パターンを観察すると、音節は左側主要部構造 (VC)

を呈していると言える。このような言語の存在は、フットよりも大きな領域のみならず、音節においても、主要部・依存子間の方向性はパラメタ化されている、ということを示唆する。さらに、興味深いことに、カクチゲル語におけるフットは有標構造である右側主要部構造を呈することから、有標的音節構造を呈する言語は、音節のみならず他の韻律領域も有標構造を呈するということが言える。

[A-7]

英語における頭子音結合の序列と聞こえ度階層の相関について

桑本裕二

一般に、音節構造は、聞こえ度配列一般化 (Sonority Sequencing Generalization; Selkirk 1984) に従い、たとえば頭子音結合  $C_1C_2$  において、 $C_1$  の聞こえ度が  $C_2$  より低くなるように配列されるが、英語には、“space” /speɪs/ のような反例がある。本発表では、通常用いられる調音様式に基づく聞こえ度階層を、有声性に特化してとらえ直し、音節先頭部の子音結合が「無声音—有声音」の序列に従うものと再解釈した場合、上記の反例も含め、英語の頭子音結合はほぼ例外なくこの基準に従っていることを示し、2子音結合  $C_1C_2$  の後部要素  $C_2$  が半母音、流音、鼻音など、対立する無声音のない有声音である場合がほとんどであること、また、対立する無声音のある有声音阻害音には、/\*pv, \*tb, \*kð/ などの結合が許されないことから、有声性の対立のある／ない有声音を区別することが、英語の頭子音結合の分布にきわめて効果的であることを示した。

【B 会場】 司会：(前半)箕浦信勝，下地理則 (後半)米田信子

[B-1]

スリランカ手話における過去テンス表示

加納満

手話言語学では文法的範疇としてのテンスの存在を認める立場と認めない立場がある。スリランカ手話(SLSL)では文脈や時の副詞により、動詞の無標形式が現在、過去、未来の解釈をとることから、文法的範疇としてのテンスの存在を否定する根拠となりうる。ところが、終了を表す FINISH の文法化した形式、動詞の音韻的特徴を構成する手の上方向への変化及び動詞と共起する顎上げからなる形式の存在は過去テンスの存在を根拠づける証拠となる。

過去テンスと考える理由の第1点は、両者が未来の時の副詞と共起せず、発話時を基準に義務的に過去を表す点である。現在の時の副詞と共起するが、発話時の直前に起きた過去の事態を表す。第2点は拘束性。前者は本動詞としては事態の終了を表し単独で生起可能だが、文法化した形式は動詞に後接し単独では生起しない。後者は屈折辞に相当し拘束性が高い。SLSLの過去テンスは文法化した形式と屈折的要素を用いるという特徴を持つ。

[B-2]

日本手話の達成動詞の完了表現に関する一考察

原田なをみ, 高山智恵子

本発表は、日本手話の母国語話者を対象に行った調査に基づき、手話言語の動詞のアスペクト特性を分析する。従来の日本手話のアスペクト研究では手指運動とアスペクト性の関連 (佐伯 2006) に重点がおかれ、音声言語と同様のアスペクト分類 (Vendler 1967) が可能かどうかは明白ではなかった。手話言語のアスペクト特性を調べるために、日本手話の母語話者4名との各90分ずつのデータセッションを遂行した。その結果、達成動詞の中でも「落ちる」が含まれる文 (例: 飛行機の出発の直前にボールが落ちた) に関しては、「落ち」る動作部分だけでなく「落ち」た

「結果」を連続して表出することによって完了アスペクトが示されることが明らかになった。達成動詞の中で他の動詞と異なる完了の形を示した「落ちる」は、その語彙意味的特徴により、日本手話においては動作とその結果の状態が複合述語的表現として表出されるという分析を提示する。

[B-3]

沖縄首里方言の他動詞派生接尾辞と使役動詞派生接尾辞

當山 奈那

首里方言の他動詞派生接尾辞=asuN と第一使役動詞派生接尾辞=asuN は同音形式であり、後接する動詞のタイプによって、あるときは他動詞に、あるときは使役動詞になる。他動詞と使役動詞の派生には制限が存在し、=asuN を後接させて派生した有対他動詞からは、=asuN がさらに後接した第一使役動詞を派生させることができない。また、第一使役動詞を述語にすえた使役文は〈強制・指令〉の意味を実現し、第二使役動詞派生接尾辞=asimi:N を述語にすえた使役文は〈許可・放任〉の意味を実現する。しかし、上記の派生の制限に伴って、第一使役動詞が派生できない場合は第二使役動詞を述語にすえた使役文が〈許可・放任〉の他に、本来第一使役動詞が実現する〈強制・指令〉の意味も担う。本発表では、このような自他動詞および使役動詞の派生の制限と使役文が実現する意味、他の琉球語諸語の先行研究も根拠にしながら、同音形式の二つの接尾辞=asuN は同じもの(同起源)であると主張する。

[B-4]

南琉球八重山黒島方言における主題標識の二重使用の機能について

原田走一郎

本発表では南琉球八重山黒島方言において観察される主題標識が二重に使用される用法の機能について述べる。同方言には主題標識=a があるが (=ja などの異形態をとる)、これが mai=ja=ja (お米=主題=主題) のように二重に使用されることがある。約 1 時間の談話資料を基に、この主題標識が二重使用された用法と、されない用法との機能的差異を考察する。その際、Kuno (1973) が、日本語の主題標識「は」に対して示した「対比」という機能に注目する。談話資料中に確認された主題標識の二重使用と単独使用の総数と、「対比」の機能を持つ例の数をそれぞれ確認したところ、単独使用の場合、合計 271 例中 100 例 (約 37%) が「対比」であったのに対し、二重使用の場合は、合計 23 例中 19 例 (83%) が「対比」であった。このように、黒島方言においては主題標識が二重使用された場合、「対比」の機能を担う傾向が強いことを示した。

[B-5]

上甕島瀬上方言における清濁の対立

黒木 邦彦

本発表では、鹿児島県上甕島瀬上の伝統方言 (以下“瀬上方言”) の音素体系を精密化するために、当方言における清濁の対立を解明する。

子音の分布と形態素の形態音韻的交替を踏まえて、瀬上方言の清濁音素を抽出すると、次のようになる:

- |           |          |               |                          |              |
|-----------|----------|---------------|--------------------------|--------------|
| (1) 清音音素: | ●/h/ [h] | ●/t/ [t ~ t̥] | ●/c/ [t̥ ~ t̥c ~ z ~ z̥] | ●/k/ [k ~ g] |
|           | ●/f/ [ɸ] |               | ●/s/ [s]                 |              |
| 濁音音素:     | ●/b/ [b] | ●/d/ [d ~ n]  | ●/z/ [dz ~ dz̥ ~ ɲ/z]    | ●/g/ [g ~ ŋ] |

一般に、濁音音素の音韻的制約は清音音素のそれよりも強い。しかし、次のように、瀬上方言の濁音音素はそれほど制約されていない:

- (2) a. 濁音音素で始まる語を許容する。
- b. 濁音音素を複数個含む語を許容する。

c. 長濁音を許容する (=濁音音素は促音音素の直後に生起できる)。

ただし、ライマンの法則のとおり、第2音節以降に濁音音素を含む語は連濁しない。[jugʲiɲu:ɲi] ‘雪国’, [kumaba:ɲu] ‘スズメ蜂’, [kobune] ‘小船’ (cf. [ku:ɲi] ‘国’, [ha:ɲu] ‘蜂’, [ɸune] ‘船’)などはこの法則に反しているように見えるが、第2音節以降の [ɲi, ɲu, ne, no, na] の [n, ɲ] は、非濁音音素 /n/ の条件異音とも解釈できる。したがって、これらはライマンの法則に明らかに違反しているとは言えない。

[B-6]

石川県七尾市能登島島別所方言の句音調に関する考察

平子達也

島別所方言のアクセント体系は、京都方言のように、二つの語声調(式)の対立に加え、下げ核の有無と位置によって説明される体系であると考えられる。二つの語声調のうち「くぼみ式」と呼ばれる語声調の語は、単独で発音される場合、語頭の一拍がやや高めに、核のある拍は高く、それ以外は低く平らに発音される。一方で、この語頭のやや高めの発音は句中では聞かれないことがある。このような現象も含め、島別所方言では複数の文節 (Igarashi, forthcoming の Word) を音調上ひとまとまりにする傾向が強い。つまり、日本語諸方言における韻律句形成に関する類型論的研究である Igarashi (forthcoming) のことばを借りれば [+ multiword AP] の方言であるといえる。従来、語声調を持ち、かつ [+ multiword AP] である方言は報告されておらず、島別所方言の音調体系は特異なものだと言える。

[B-7]

三重県尾鷲市方言の後部3拍複合名詞アクセントについて

平田秀

発表者は、三重県尾鷲市方言について2010年から現地調査を行い、以下の(1)~(4)を明らかにした。

同方言のアクセント体系は、(1)(2)の通りである: (1) 下げ核を持つ。(2) 低起上昇式、低起上がり式、平進式の3式を持つ。

同方言において(2)で述べた3式の対立を明確に示す後部3拍複合名詞のアクセント規則は、(3)(4)の通りである: (3) 低起上昇式では、語末から数えて3拍目に下げ核が来るもの、語末から数えて2拍目に下げ核が来るもの、無核のものが出る。(4) 低起上がり式・平進式では、語末から数えて3拍目に下げ核が来る。

(2)で述べた通り、尾鷲市方言は3つの式の対立を持つ。日本語諸方言において、3つの式の対立を持つものは香川県観音寺市伊吹島方言ただ1つの報告しかなく(上野善道1985)、非常に稀な音韻的特徴であると言える。

[C会場] 司会: (前半)片桐真澄, 松岡雄太 (後半)河内一博

[C-1]

バスク語レクンベリ方言の再帰所有形と主語

石塚政行

三人称による所有を表す代名詞 BERE 「彼の」という形式はバスク語の諸方言に存在し、発表者の調査したレクンベリ方言ではその先行詞は同一文中に無ければならない。またこの方言ではそ

れに加えて、BERE を含む名詞句の文法役割と焦点化の有無が、BERE の使用の可否に関与している。すなわち、わずかな例外をのぞいて、単文の場合には、焦点化されていない S/A に BERE を用いることはできない。これは、焦点化されていない S/A に含まれる BERE の先行詞として、同一節中のそれ以外の項や付加詞が認められないことによるものである。さらにこの方言では、焦点化されていない S/A がともに絶対格標示を取る。主題でありかつ S/A であるような項が他の項と非対称的な関係にあるというのは、通言語的に主語に見られる特徴である。この方言の BERE や格標示の特異性は主語というカテゴリーの成立を原因とすると考えられる。

## [C-2]

### タガログ語の相互構文

長屋 尚典

タガログ語の相互構文、すなわち、対称的な行為を表現する構文には、mag-行為者焦点動詞を用いた語彙的相互構文と isa't isa 'each other' を用いた統語的(迂言的)相互構文の2つがある。本発表では、これら相互構文それぞれの統語論的・意味論的特徴、ならびに2つの構文間の関係を解明する。本稿の主張は以下の4つにまとめられる。第一に、語彙的相互構文と統語的相互構文は対称的な行為を表現する点は同じだが、前者には行為の対称性以外にも sociative などの意味がある。第二に、語彙的相互構文は「本質的に対称的な行為を意味する動詞語幹」としか生起しないが、統語的相互構文にはそのような制約はない。第三に、統語的相互構文は意味的にさまざまな動詞語幹と共起するだけでなく、統語的にも幅広い環境に生起することができる。最後に、語彙的相互構文と統語的相互構文が同じ語幹について用いられたとき、意味的違いが生じる場合がある。

## [C-3]

### シベ語の動詞 o-「なる」の語用論的機能

児倉徳和

シベ語(満洲=ツングース諸語)の動詞 o-「なる」は談話において話し手の「判断」のほか、「近接未来」や「許可」を表すが、本発表では、o-のこれらの語用論的機能を、文が個人の知識の状態を変化させる指令を内包しているという見方に立って論じた。そして結論として、動詞 o-「なる」の機能を「個人が本来持っている知識と矛盾しないように新たな知識を追加する」とした上で、「判断」は「この服は(服としては)大きい、(私が着るには)小さい」というように、発話の状況において問題となる知識を本来持っている知識と矛盾しないように追加するもので、「近接未来」は「(聞き手がどのような知識(意向)を持っているかは分からないが、話し手自身は)聞き手が遊びに行く(と考える)」というように、聞き手が本来持っている知識(意向)と矛盾しないように知識(話し手の意向)を追加するものであり、後者は更に間接発話行為として「許可」を表しうる、と主張した。

## [C-4]

### サハ語(ヤクート語)の勧誘形における「双数」の解釈

江畑冬生

サハ語の勧誘形には、接尾辞-Iŋ の有無による2種類の形式がある。接尾辞-Iŋ を含まない形式は「話し手+聞き手」の2者を動作主とするが、接尾辞-Iŋ を含む形式の動作主は3者以上である。サハ語においてこのような双数/複数の区別は勧誘形に限られる。この接尾辞-Iŋ は、勧誘形以外に挨拶言葉や命令法にも現れる。勧誘形の場合とは異なり、挨拶言葉・命令法では、単数形に接尾辞-Iŋ を付加し複数形が形成される。従来は動作主の数にのみ注目していたため、接尾辞-Iŋ の有

無を、双数／複数の対立とも単数／複数の対立としても記述してきた。その結果、勧誘形にのみ双数という範疇が存在するという体系が提示された。本発表では、接尾辞-*lj*の有無は聞き手の数と相関することを新たに主張する。すなわち、勧誘形・命令法・挨拶言葉では、聞き手が1人であれば接尾辞-*lj*を含まない形式を用いるが、聞き手が複数人であれば接尾辞-*lj*を含む形式を用いると統一的に説明可能である。

[C-5]

Event structure and agreement violations in Icelandic resultatives

Einar Andreas Helgason

In Icelandic, Adjectival resultative predicates can often take either an agreeing or a non-agreeing form with respect to the element it is predicated of. I argue that this variation in agreement is dictated by a functional constraint on how the structures of events are interpreted. When the two subevents (i.e. the *cause* subevent and the *result* subevent) depicted are coidentified, the adjective takes an agreeing form; but when the subevents are not coidentified, a non-agreeing form is appropriate. Thus, when only a coidentification interpretation is possible, an agreeing form is preferred; while a non-agreeing form results in reduced acceptability. Conversely, when coidentification between the *cause* subevent and the *result* subevent is not feasible, a non-agreeing form is preferred.

[C-6]

Words *Čelovek* ‘Man’ and *Štuka* ‘Item’ as Numeral Classifiers in Russian

Ksenia GOTO

It is considered that in Russian sortal numeral classifiers are absent. It means that a numeral occurs in direct constructions with a count noun without the additional presence of a classifier. However, sometimes words *čelovek* ‘person’ and *štuka* ‘item’ occur between the numeral and the count noun. This study focuses on the syntactic properties and pragmatic functions of such constructions. I argue that these words can be called numeral classifiers in the sense that they are used in numeral constructions and categorize the referent of a noun in terms of its inherent properties (human - non-human) without bringing any additional meaning.

[C-7]

マヤ語の台湾先住民(高砂族)語群からの起源

大西耕二

マヤ語族(MY)の起源を探るため、MY諸語の(Swadesh基礎200語彙中の)基礎身体部分名称(BBPN)(約30名称)を意味する語彙を米先住民諸言語、Eurasia諸言語、南島語族諸言語等の基礎的語彙と比較して、MY BBPNとの同祖語彙(cognate=CG)を検索。MY語彙としてはKauffman(2003)のマヤ語語源辞書(on Web)、Hoffring(1997)(Itzaj)、Vascuez(ed.)(1980)、Tozzer(1922)の辞書等を利用。南島語族(AN)との比較ではTryon(1995)“*Comparative Austronesian Dictionary*”(CAD)のAN5亜群80言語の約1300意味項目の語彙list及び「言語による台湾高砂族伝説集」(台北帝大言語学研究室,1935)の単語表と比較した。MY BBPNのCG21項目の内、17.25項目はANに、その内10.08項目は台湾諸語(FRM)(=高砂族)に、5項目はOceanicに最酷似型が属し、 $\chi^2$ 二乗検定でFRMに有意に( $P < 0.005$ )高頻度で見られ、音韻対応上の矛盾がない。MYはFRM由来で、語彙形態からアタヤル語に近い。

【D会場】司会：(前半)斎藤倫明、板橋義三 (後半)酒井弘

## [D-1]

## アイヌ語十勝方言における証拠性と叙述類型

高橋靖以

本発表では、アイヌ語十勝方言の証拠性 (evidentiality) に関する表現を叙述類型の観点から検討する。そして、場面レベル叙述 (stage-level predication) と個体レベル叙述 (individual-level predication) の区別が、証拠性を表す一部の形式の選択に関っていることを明らかにする。

アイヌ語十勝方言には、証拠性に関する名詞化辞 (nominalizer) として *ru, sir, hum, haw* という四つの形式が存在する。この中で *sir* という形式は、従来視覚による直接証拠を表すものとされてきた。しかし、*sir* が用いられるのは、未完結 (imperfective) の事象や場面レベルの叙述に限定される。一方、視覚情報と考えられるケースであっても、個体レベルの叙述の場合は、情報のタイプに関し無標である *ru* が用いられる。

上記の事実は、視覚に基づく直接証拠の表現において、叙述のタイプに応じ異なる形式が選択されていることを示すものといえる。この現象は、視覚性を表す形式が個体レベル叙述を許容しないという制約に基づくものと考えられることができる。

## [D-2]

## 琉球宮古島野原方言の間接的エヴィデンシャルティ

狩俣繁久

南琉球諸語の宮古語野原方言には動詞 *siari* 中止形に *uks* (置く) を語彙的資源にする *si: uks* がある。客体変化動詞の *si: uks* は、発話時に継続する客体の変化結果を表す。客体変化動詞には過去の設定時に存在した客体結果を表す過去形 *siuksata:* がある。客体変化動詞以外の運動動詞、存在動詞、形容詞、述語名詞も *si: uks* の形をとるが、記録、痕跡などの間接証拠に基づいて行う間接確認を表す。*si:uks* は、発話時の間接証拠に基づいて発話時以前に実現した出来事の間接確認だけでなく、過去の設定時の間接証拠に基づいて設定時以前に実現した出来事の間接確認も表す。間接確認の形式には過去形がない。*si:uks* は反実仮想文の述語としてもあらわれる。野原方言の間接的エヴィデンシャルティ形式の中核をなす *si:* は、*si* 連用形に存在動詞 *ari* (有り) を組み合わせたもので、北琉球諸語の間接的エヴィデンシャルティ形式の中核をなす *site* 中止形と異なる。*uks* を語彙的資源にすることと *siari* 中止形の存在は野原方言の特徴である。

## [D-3]

On a Korean evidential marker *-te-* in monologue-interrogatives (A comparison with ‘*-tela / -tenka*’)

Park, Chunhong

The Korean pre-final ending *-te-* has been discussed in the literatures in various ways, e.g. retrospective, reportative and evidential marker. Also it has been mainly analyzed as perspective shift on the basis of interrogative with ‘*-tenya?*’ But this paper focuses on ‘*-tela / -tenka*’ which have a common morpheme, i.e. ‘*-te-*’, especially the usage in monologue-interrogative sentence. In Bak (2006), these two forms with past tense marker ‘*-ass/ess-*’ in monologue-interrogative are pointed out that do not express “*huncek hwakin* (trace confirmation)” and past perceptual meaning, while ‘*-tela*’ as in declarative sentence and ‘*-tenya?*’ has the meaning in that case. However, the question about the reason why ‘*-tela*’ can be used in monologue interrogatives with wh-words and what the function of ‘*-te-*’ between ‘*-tela / -tenka*’ is remains an answer. The goal of this paper is to shed light on the distinction between ‘*-tela*’ and ‘*-tenka*’ in monologue-interrogative and makes an attempt to account for ‘*-tela*’ with the feature of factivity accompanying evidential meaning. And we will consider how the feature of factivity on ‘*-te-*’ can be weakened with applying interrogative form, ‘*-nka*’, to it. As a consequence, I propose that while the reason that ‘*-tela*’ can

be used in monologue interrogatives with wh-words is due to factivity, ‘-tenka’ is related to the nature of interrogative marker ‘-nka’.

[D-4]

#### 韓国語の複雑述語とモジュール形態論

和田 学

韓国語の複合動詞は、生産性、意味的透明性、構成素の代用表現化の可否などに基づいて、語彙的複合動詞(MVC)と統語的複合動詞(AVC)に分けることができる。MVC/AVCはその構成素が、語としての緊密性を持ち、空所化、移動が許されないという共通点を持つことから、独立した語形成部門の存在を提唱するモジュール形態論(影山(1993))による説明が可能である。しかし、MVC/AVCの構成素は、限定詞の挿入及び第2要素のみの反復が可能であり、独立した語としての性質を持つ。本発表では、 $V^0$ 同士が結合して $V^0$ を構成する( $[v_0 V^0 V^0]$ )という構造が語形成規則が適用する語彙部門と統語部門に存在することを主張する。更に、この構造は語形成規則の適用しない純粋な統語部門にも存在すると仮定すると、軽動詞構文における動作性名詞、一部の副詞と否定辞の間に見られる語順の制約が容易に導けることを示す。

[D-5]

#### 日中両言語の擬音語の意味的特定性 ―音の発生源を中心に―

游韋倫

日中両言語の擬音語の意味的特徴は大きく異なると言われている。本発表では、音が発生するときの音源(音の発生源)を中心に比較考察を行った。考察の結果として、音源は以下の基準に基づいた指定を持つ: ①有生性②状態③材質④形状⑤大きさ。日本語においては、擬音語の音源は、上述した指定が観察される。一方、中国語においては、形状と大きさの指定を持つものが観察されない。全体的に日本語は中国語より擬音語の特定性が高い。この事実は2つのことに結びつく。まず、日本語の擬音語は特定性が高く、音の発生にまつわる要素(百科事典的知識)が豊富なため、具体的な場面を描写できる。一方、中国語の擬音語はそれが低いため、喚起する場面が漠然としている。次に、日本語の擬音語は中国語より意味の拡張が起こりやすい。なぜなら、意味的特定性が高い擬音語は、特定された要素が意味の拡張に利用されやすいからである。

[D-6]

#### 中国語関係節の処理過程についての再検討

翟勇, 備瀬優, 坂本勉

関係節構造は言語間で異同があるが、それらがどのように処理されているかということは、文処理研究における重要な課題の一つである。先行研究では、様々な言語において、目的語関係節の方が主語関係節より処理負荷が高いという結果が報告されている。ところが、中国語関係節処理については、相反する二つの結果が報告されており、統一した見解が得られていない。本研究では、先行研究の問題点を排除した実験文を用いて被験者ペース読み実験を行った。実験では、関係節マーカー「的」と主要部名詞句において主語関係節の方が目的語関係節より有意に読み時間が短いという結果が得られた。従って、他の言語と同様に、中国語においても、目的語関係節の方が主語関係節より処理負荷が高いということが明らかになった。さらに、中国語関係節処理では、関係節マーカー「的」が入力されてから、フィラーと空所の依存関係の構築が行われるということも明らかになった。

[D-7]

Rika YAMASHITA

This paper discusses the use of a particular contact-induced variety of Japanese (Stylised South Asian Japanese, henceforth SSAJ) using examples from recorded natural discourse classroom conversations in a mosque community in Tokyo suburbs. SSAJ is used by pupils who speak standard Japanese fluently, and it resembles the second language variety of Japanese spoken by the South Asian males of the community. SSAJ differs from pupils' standard Japanese in phonetic, phonological, lexical, syntactical, pragmatic and paralinguistic features. This variety does not fall in any of the following categories often associated with contact varieties: unmarked vernacular, interlanguage, secret language, or foreigner talk. The study would complement recent sociolinguistic studies in Japan on emerging styles and creative sociopragmatic uses of them.

【E会場】司会：(前半)漆原朗子，岡俊房 (後半)宮本陽一

[E-1]

理由副詞類の生成位置とコントロール節の修飾について

藤井 友比呂、瀧田 健介

英語においては、*why* のコントロール補文の修飾が可能であるとされるが、その事実は、コントロール節が定形節よりも「小さい」という主張と組み合わせられて、*why* の CP 修飾子仮説 (Rizzi 2001) にとつての問題であるとされる (Shlonsky & Soare 2011)。本発表は、コントロール節を修飾する付加詞は、理由一般を問える付加詞ではなく「手段」の付加詞であるという一般化を日本語と英語のデータに基づいて主張する。Stepanov & Tsai 2008 に見られるように、動作主性を要求する理由付加詞は *vP* に、非動作主志向の理由副詞は *CP* に基底生成されるということが通言語的一般性をもつ、という主張がある。本発表は、コントロール節に出現しうる「低い」*why* が手段という動作主志向的な意味に制限されるという一般化、および理由一般をあらあわす付加詞がコントロール節を修飾できないという一般化を支持する議論を行い、*why* によるコントロール節の修飾可能性は、Stepanov & Tsai 流の *CP* 修飾子仮説を支持すると主張する。

[E-2]

併合とラベル付けを巡る覚え書き

後藤 亘

併合が作り出す統辞体がインターフェースで解釈されるためには、ラベルが必要であり、それは最小探査アルゴリズムにより決定されると想定する。また、句と句を直接要素とする対称的な {*XP*, *YP*} 構造のラベルは、「対称性を破る移動 (A)」か「対称性を形成する一致 (B)」を介して付与されると仮定する (Chomsky 2012)。この枠組みを採用すると、「(A) も (B) も関与し得ないような {*XP*, *YP*} 構造を含む文は、インターフェースでうまく解釈されなくなる」と予測される。本論文ではこの知見を生かし、日本語のスクランブリングが作り出す {*XP*, *YP*} 構造を考察する。特に、派生の最後に作り出される {*XP*, *YP*} 構造とその途中で作り出される {*XP*, *YP*} 構造では、ラベル付けの適用可能性について異なった要求をすると提案することで、Saito (2003) が併合に対して措定していた条件を排除することができる」と論じる。

[E-3]

英語の演算子不定詞節について

(1) と (2) に含まれる不定詞節は不定詞関係節・不定詞目的節とそれぞれ呼ばれる。(1a)・(2a)には空演算子 Op が関与していると仮定し、このような不定詞節を Op 不定詞節と呼び、一方、顕在的 Wh 演算子を含む不定詞節は Wh 不定詞節 (両者をまとめて演算子不定詞節) と呼ぶことにする:

(1) a. The knife [Op to cut the ham with] is on the table.

b. The knife [with which to cut the ham] is on the table.

(2) a. (My friend recommended a knife<sub>i</sub> to me.) I bought the knife<sub>i</sub>/it<sub>i</sub> [Op to cut the ham with].

b. (My friend recommended a knife<sub>i</sub> to me.) I bought the knife<sub>i</sub>/?it<sub>i</sub> [with which to cut the ham].

本発表では Chomsky (2008) の枠組みで、英語の演算子不定詞節を派生する仕組みを提案する。そこでは、Op 不定詞節における Op の移動と Wh 不定詞節における Wh 関係詞の移動が異なる性質を持った移動となるが、それに対する経験的証拠として、石居 (1985) が (本発表の用語を用いれば) Op 不定詞関係節と Wh 不定詞関係節の違いとして挙げたデータ (*I found a cot to arrange for Mary to sleep on./\*I found a cot on which to arrange for Mary to sleep.*) などを取り上げる。

[E-4]

右枝節点繰上げ：削除分析と多重支配分析

木村宣美

本発表では、RNR 要素を等位項に設定できる「全域的 RNR 構文」(*I'm interested in but rather apprehensive about their new proposal.*)と設定することができない「対称的 RNR 構文」(*John whistled and Mary hummed at equal volumes.*)という 2 種類の RNR 構文に対して、二つの仮説 ([A] 全域的 RNR 構文: RNR 構文の in-situ 削除分析: RNR 要素は、一番右側の等位項内にある。[B] 対称的 RNR 構文: RNR 構文の ex-situ 多重支配分析: RNR 要素は、すべての等位項に多重に支配されている。)に基づく分析を提案する。そして、本発表での分析と Parallel Merge 等に基づく多重支配分析を比較し、RNR 要素と等位項の一致現象に基づき、「全域的 RNR 構文」の in-situ 削除分析の方が優れていることを指摘する。

[E-5]

日本語の主語位置－優位性効果からの考察－

水口 学

日本語の主語位置についてはこれまで様々な議論がある。本発表では Wiltschko (1997)に基づき、「優位性効果」の考察を通して、優位性効果が観察されない日本語では主語が動詞句内から移動すると論じ、日本語の主語位置が動詞句の外側にあることを主張する。Wiltschko (1997)は、主語がかき混ぜによって移動し、D-link されることで優位性効果が消失すると提案している。しかし、この提案には問題があることを指摘する。本発表では、かき混ぜによる主語の D-linking ではなく、「主語の移動」自体が優位性効果の消失に重要な役割を果たすと主張し、主語移動によって目的語のかき混ぜが可能になることで優位性効果が消失すると論じる。そして、これが最小探索から原理的に導かれることを明らかにする。本発表の主張が正しいとすると、(1)優位性効果の消失が D-linking とは無関係であること、そして(2)素性継承を再考する必要があること、が導かれることになり、こうした帰結の妥当性を英語のデータを基に議論する。

[E-6]

Dative Subject and Nominative Object Constructions in Naha Ryukyuan

Kunio KINJO

This study investigates the nature of dative subject (DS) and nominative object (NO) constructions in Naha Ryukyuan and proposes a micro-parametric difference between Japanese and Naha Ryukyuan. Although DS/NO constructions may occur in Japanese when the potential suffix *-rare* is attached to the predicate, the corresponding sentences in Naha Ryukyuan are ungrammatical. Based on the analysis of Ura (1999) and Takahashi (2010) which assume that *-rare* optionally absorbs the accusative Case-feature of *v* and T assigns the nominative case to the object, I argue that the lack of DSs and NOs in the potential constructions in Naha Ryukyuan is due to the lexical property of the potential suffix *-riin* or *-uusun* which cannot absorb *v*'s accusative Case-feature.

[E-7]

### 中国語の遊離数量詞構文の構造

郭楊

本発表では、数量詞が遊離している（名詞-数量詞）構文では、名詞と数量詞が Merge したときには、QP になると考え、そこから遊離数量詞 Q が自分の c-command 領域から N だけを取り出し、項にとるということを主張する。この仮定によって、遊離数量詞構文における様々な容認不可能な例文が説明されることができた。また、このような LF 移動が起こる原因を、本発表では、英語と異なる中国語の格理論を提案することによって関係付けられた。

【F会場】司会：(前半)遠藤喜雄，毛利史生（後半)田中裕幸

[F-1]

### 日本語の多重主語構文に対するカートグラフィーの観点からの分析

山田 敏幸

日本語の多重主語構文では、多重主語に意味の差異が観察される。「象が鼻が長い」は、「象が」が総記（焦点解釈）、「鼻が」が中立叙述を表す（久野 1973）。まず、先行分析では、「象が」と「鼻が」を同一範疇句（時制句）の多重指定部に想定するため、意味の差異に統語（構造）的説明が与えられないことを指摘する。次に、カートグラフィー研究（Rizzi 1997、Cinque 1999 など）の知見を基に、「象が」と「鼻が」を異なる範疇句（焦点句と時制句）の指定部に想定するという分析を提案し、意味の差異を統語・意味インターフェイスでの帰結として捕らえる。補文標識（C）システムにおいて普遍的に想定される機能範疇句（焦点句など）が、日本語の多重主語構文という（個別）言語現象に反映されていることを議論する。最後に、構造と意味の観点から、日本語の他の言語現象（かき混ぜなど）に対しても新たな分析が可能かどうか模索する。

[F-2]

### Feature Transmission and Long Distance Agreement in Japanese and Tsez

Hajime Takeuchi

Since the implementation of Agree in Chomsky (2000, 2001), Case has been considered to be one of the reflections of phi-feature agreement, and the relation between a probe and its goal is restricted by the PIC. There are, however, a number of languages that seem to allow an NP to agree with a probe across a phase boundary. One of such phenomena is Long-distance agreement. In this talk, I present a unified account on such phenomena in Japanese and Tsez, building on the framework put forward by Chomsky (2008). Under

the analysis, phi-features retained on a phase head motivate the movement of the goal NP to the relevant phase-edge, and enables us to capture subtle differences between these two languages.

[F- 3]

ドイツ語の優位効果消失条件であるスクランブリング移動

山本 将司

ドイツ語には Chomsky (1977)の優位条件 (Superiority Condition) に反した移動が現れた二重疑問詞疑問文が数多く存在する。この事実に対して本発表は、I) Pesetsky & Torrego (2001)が提案した「時制素性(uT)は主格素性(Nom)によって照合可能である」という仮説はその成立が言語毎にパラメトリックに異なる、II) Müller (2004)に倣いスクランブリングは小動辞 *v* が持つ素性'[uΣ]'を削除する移動である、III) 二重疑問詞疑問文に於ける優位性は移動に課せられたコストによって見積もられる、と仮定することで、ドイツ語の優位効果、及びその消失に対して優位条件や最短牽引の条件 (Attract Closest) に言及しない説明を試みる。この主張が正しければ、二重疑問詞疑問文内の下位疑問詞がスクランブリングが不可能な統語環境に生じると、ドイツ語に於いてさえ優位効果が観察されるという予測が導かれる。そこで、ドイツ語の節に与えられる(非)定形性、及び '(in)coherency' という性質に注目し、この予測の検証を行う。

[F- 4]

素性継承からの倒置への接近

谷川晋一

本発表は、場所句倒置や Preposing around *be* といった英語倒置構文を Chomsky (2008) の素性継承の観点から論じる。具体的には、Goto (2010) や Obata (2010) に従って、フェイズ主要部 C が T への素性放出に関して随意性を持つと提案した上で、話題主要部 C が  $\phi$  素性を T に放出しない場合に、場所句等の非名詞句が T 指定部と C 指定部に同時に移動可能になるという新しい分析を提示する。そして、本分析から、以下に挙げる 3 点が導かれることを示す。

- ・非名詞句の「T 指定部への移動」と「T 指定部から話題位置への移動」という従来、独立的に捉えられてきた 2 つの移動特性は、2 つの位置への同時移動という観点から捉え直される。
- ・ *Wh* 主語と同様に、当該倒置構文でも T 指定部から C 指定部への空虚な移動は存在しない。
- ・倒置形式と話題化形式の違いは、話題主要部 C の  $\phi$  素性放出の違いに還元される。

[F- 5]

On the distribution of the reflexive pronoun *yen/ban* in modern Mongolian

Lina Bao , Megumi Hasebe, Hideki Maki

This paper investigates the distribution of the reflexive pronoun *yen/ban* when it appears with *öber* 'self' in Mongolian. It exhibits the following properties: (i) The Closest Subject Condition, (ii) No Clausemate Condition, (iii) Partial Sensitivity to Island Constraints, (iv) Optionality and the Saving Effect, (v) The Condition on Adjunction Sites, and (vi) The Locality Condition on Copying. Based on these facts, we argue (i) that the reflexive pronoun undergoes two types of movement: LF movement to its antecedent and (optional) overt adjunction to a head with [+N] feature, (ii) that the LF movement is constrained by Relativized Minimality, and (iii) that the overt adjunction of a reflexive pronoun to a nominal head is possible only from an NP marked genitive.

[F- 6]

The genitive case in modern Ulster Irish

This paper investigates the distribution of genitive case in Ulster Irish, and attempts to clarify the nature of chain formation in this language. In Ulster Irish, when the matrix predicate is a control verb such as *thosaigh* 'to start,' the object of the complement VP is marked either accusative or genitive. However, when the object is wh-moved, the resulting structure is deviant, if the head noun is marked genitive. We then point out the generalization on the elements in CP SPEC in Irish: No phrase with a particular morphological case can be adjoined to C'. With this generalization, we argue that a morphological case mismatch in a given A'-chain does not affect the full interpretation of the chain at LF.

[F- 7]

Another instance of idiolectal variations in modern Japanese: Long distance genitive case licensing

Megumi Hasebe, Hideki Maki

This paper points out that there are two groups of native speakers of Japanese in terms of their acceptability of long distance (or deep) genitive case. We call those who allow the deep genitive Group A, and those who do not Group B. In terms of parameter setting, children in Groups A and B are endowed with the licensing mechanisms involved in both Hiraiwa's (2001) Adnominal Form Approach and Miyagawa's (1993) D-Approach, and children in Group A had a chance to access to the data, discarding the Adnominal Form Approach, while children in Group B had no such a chance, so that they keep both. The present study strengthens Harada's (1971) original argument for idiolectal variations in Japanese.

【G 会場】 司会 : (前半)桐生和幸, 入江浩司 (後半)児玉望

[G- 1]

「自己」動詞構文の構造と意味—再帰性と分離不可能所有構文—

西垣内 泰介, 阿部 雄一郎, 日高 俊夫

「(自分の) 仕事を自己批判した」など「自己」ではじまる漢語動詞構文の統語的・意味的特性について議論する。「自己」がもたらす統語的・意味的特性は (i) 再帰性 (ii) 目的語に対する影響である。この構文は分離不可能所有構文、二重 VP の構造を持ち、上位の VP の主要部は発音されない AFFECT という動詞であると考えられる。

(1) NP<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> (NP<sub>i</sub>) [<sub>VP</sub> [<sub>DP</sub> (NP<sub>i</sub>) NP] 自己 VN-V ] AFFECT ]

(内側の) 目的語 DP 内部の NP が外側 VP 指定部を経て主語へ (θ 位置間の) NP 移動を受ける。移動の始発位置は任意的に「自分」とスペルアウトされ、純粹の照応形として、(i) 緩慢な同一性、(ii) c 統御 (iii) 「自己経験 (de se) 解釈」などで通常の「自分」と異なる性質を示す。目的語は韓国語の分離不可能所有構文の内側目的語に対応する制約を受けること、DP 内部の痕跡 (「自分」) は「行為者」の θ 役割を持ち、DP の特異な分布の原因となることを示し、さらになぜ「行為者」のみが移動できるかを論じる。

[G- 2]

Negative forms with the thematically-adjusted affixal stem, /raN/

Koga, Hiroki

We will show that Sasaki's 2012 'reanalysis and analogy' are not adequate, and cannot explain whether each verbal negative form of Japanese-Saga western dialect contains /raN/ or not, or /N/ alone, immediately after the verbal stem. For example, the negative forms of some so-called 'vowel /e/-final' verbs consist of the

verbal stem plus the negative affix /raN/, as in /ne-raN/ `sleep-not', and yet, those of other `vowel /e/-final' verbs with the affix /raN/ is not grammatical, as not in \*/tabe-raN/ `eat-not'. We propose a falsifiable, restrictive and explanatory-adequate analysis of various phenomena of the verbal negative forms in the dialect on Kiyose's `conjugation'-free assumption and Koga's 2012 HPSG-like syntax in conjunction with an OT-like explanations with violable surface constraints.

[G-3]

### Linking Morpheme in Recursive Compounds

Makiko Mukai

This paper shows that the existence of a linking morpheme (LM) is not related to recursivity of compounds in the given language. Recursion is defined as embedding at the edge or in the center of an action or object of an instance of the same type. On the other hand, iteration, is simple unembedded repetition of an action or object (Bisetto 2010).

Based on these definitions, there are five types of languages.

- (1) A LM is in recursive compounds.
- (2) A LM is in genitive compounds and the language has recursive compounds.
- (3) A LM is in coordinate VNN compounds or nominal coordinate compounds.
- (4) A LM is in iterated compounds.
- (5) Recursive compounds are productive but no LM.

[G-4]

ゲルマン語強変化動詞および過去現在動詞 IV, V 類に見られる形態的差異について：  
Schumacher(2005)論考の批判的考察と形態的混交説からの提案

田中 俊也

ゲルマン語強変化動詞の過去形と過去現在動詞の現在形は、ともに印相祖語の完了形を継承しているという見解が従来の印欧語比較言語学研究において最も受け入れられてきた。しかし、IV、V 類動詞については、強変化動詞過去複数形では語根に延長階梯母音をもつ形態が生じ、過去現在動詞現在複数形では語根にゼロ階梯母音をもつ形態が生じる。完了形のみからの発達とする従来の説では、この差異について十分な歴史的説明が与えられないように思われる。Schumacher (2005) はこの見解に基づく最新の研究であると言えるが、彼の「bigētun-規則」に基づく論考においても、当該の形態的差異については十分な説明がなされていない。本発表では、Schumacher (2005) の論考も含め、「完了形のみからの発達」とする説に対する批判的考察をまず行い、その後それとは異なる立場から、当該の形態的差異がどのように発達したかについての説明を試みる。

[G-5]

### ムラブリ語における 1.5 音節語の膨張

伊藤雄馬

ムラブリ語（タイ、モン＝クメール諸語）には 1.5 音節語が丁寧な発話において 2 音節語となる「1.5 音節語の膨張」が観察される（「無くす」/pa-tok/[pa.'tok], [,paṯ.'tok]）。

ムラブリ語において強勢のある音節は常に重音節である。弱強格で発音される 1.5 音節語は軽音節と重音節から成るが、丁寧な発話では弱強格が崩れ、軽音節に強勢が置かれる。その結果、通常軽音節だった音節が重音節になり、1.5 音節語が 2 音節語になると考えた。

また、1.5 音節語に含まれる母音間にある閉鎖音の入渡り部分を、無解放閉鎖音と解釈し、さらに音節末を示す境界信号と解釈した場合、1.5 音節語は 2 音節語に解釈されうることを示した ([ata]=[aṯta]→/at.ta)。

また本発表は、Matisoff (1990) の東南アジア言語における通時的変化モデルの未考察部分を補完するものである。

[G-6]

モンゴル語の母音調和—外来語を用いた分析—

植田尚樹

モンゴル語ハルハ方言の接尾辞の母音調和は、語幹のどの母音のどのような特性が引き金となっているか、本来語からは明らかにし難いため、本来語には見られない母音配列を持つ外来語を用いて分析することが有効である。外来語を用いた分析の結果、接尾辞の母音調和は基本的には語幹末の母音が決めているが、その他にもアクセント、語末からの距離、母音の聞こえ度という、他言語の母音調和においても観察される要因が関係していることがわかる。これらの要因は、話者や語の定着度によってその優先順位が変わり得るという点で、いずれも決定的ではない。語の定着度によって母音調和の実現が異なることから、モンゴル語の母音調和の適用が語彙層によって異なっており、階層性があることが示される。さらに、定着度の高い外来語の振る舞いから本来語の母音調和の実態を推定でき、母音調和の本質に迫ることが可能である。

[G-7]

西夏語の否定接頭辞の音変化について

荒川 慎太郎

西夏語には、異なる西夏文字で表記される3種の否定接頭辞 (A <sup>1</sup>mi:-, B <sup>2</sup>me:-, C <sup>1</sup>ml:-) がある。それらの用法・機能を概観した後、B, Cは本来Aであったのが、「動詞語幹—否定接頭辞—助動詞」という環境において、後続する助動詞の音に影響されて成立した可能性があることを検証した。

Bは「過去の経験」を表す助動詞<sup>2</sup>de:に前接することが多く、Cは「可能」を表す助動詞<sup>2</sup>nwi:に前接することが多い一方、Aがそれらの助動詞に前接される例は見られない。Bと、後続する<sup>2</sup>de:は韻母が同じである。もともとAが<sup>2</sup>de:に前接したのが、-i:>-e:の変化（逆行同化）が起こりBとなったと推定した。一方、西夏語では複合名詞などでCi:-Ci:の連続を避けたと思われる音変化が認められる。Cは、このような連続を避けるために、Aの韻母が-i:>-l:に変化した（異化）と推測した。次のような変化としてまとめられる。

Bへの変化 <sup>1</sup>mi:- + <sup>2</sup>de: → <sup>2</sup>me:-<sup>2</sup>de:

Cへの変化 <sup>1</sup>mi:- + <sup>2</sup>nwi: → <sup>1</sup>ml:-<sup>2</sup>nwi:

[H会場] 司会：(前半)芝垣亮介，青木博史 (後半)江口正

[H-1]

語彙的多義性と項の具現化

工藤 和也

本稿は、英語の構文交替に関する様々な文例を検討し、論理的含意関係が変化しない構文交替に参加する動詞は相補的多義性を備えた単一の語彙項目であることを主張して、構文交替に対する語彙意味論的研究として Pustejovsky (1995)の多義的アプローチの議論を支持する。具体的には、場所格交替動詞や与格交替動詞が等位構造の前項と後項において2つの異なる構文パターンを認可できるという言語学的に新しいデータを提示して、この時の構文交替動詞が同一文内で2つの

異なる事象を同時に指示しているという意味論的事実と、等位構造に関する統語論的研究の成果から、これらの動詞が Weinreich (1964)の言う相補的多義語であることを示す。さらに、構文交替動詞が各構文で表している語用論的推意が異なることを根拠に、構文交替は、相補的多義動詞が持つ複数の語義と統語構造との全射的な写像関係によって引き起こされることを主張する。

## [H-2]

### 「青い目をしている」の拘束主題文分析

平川 八尋

「する」は多面的な機能を果たす。漢語名詞+「する」(勉強する、仕事する)や、独立した語彙動詞として補語をとる。(いい働きをする、仕事をする)さらに、「青い目をしている」構文(以下「青い目文」)では、語彙的意味をもたないが、補語への強い選択制限(身体名詞句)があることが知られている。(佐藤 2003, 影山 2004) 本研究では、「青い目文」が「主題が述部内名詞句を拘束する文」(拘束主題文: Brunson&Cowper 1992)であることを提案し、「述部の属性解釈が主題へ付与される」という分析を提示する。これにより、同構文の文法的特異性や先行研究では説明できない一時的特性「赤い顔をしている」が適格文になることへの説明も可能となる。また、拘束主題文分析が存在所有文(彼は病気の妻がある)、及び名詞述語文(彼は大きい手だ)へも適用可能であるかについても言及する。

## [H-3]

### 古代日本語における係助詞ソ(ゾ)の出現傾向について

勝又 隆

発表者の調査によれば、古代日本語における係助詞ソ(ゾ)は、いわゆる係り結び構文において、文の種類別に以下の文成分に最もよく承接する。(1)他動詞文においては目的語、(2)非意志的自動詞文においては主語、(3)意志的自動詞文においては主語以外の成分、(4)一項形容詞文においては主語。

ただし、いずれの場合も他の成分にも承接するため、この現象は「規則」というよりも、承接しやすい要素が文の種類によって異なるという「傾向」の問題として捉えるべきものである。この傾向は、類似の係り結び構文を構成する係助詞コソなどには見られず、係助詞ソ(ゾ)に特徴的な現象である。文構造の観点からは係助詞ソ(ゾ)は外項には承接しづらく、動詞句内の要素に承接しやすいものと理解される。本発表ではこのような傾向が見られる理由について、当該構文の機能と情報構造の面から説明する。

## [H-4]

### 限界性(Telicity) – 日本語における動詞・名詞間の相互作用に関する考察

張 楚榮 (TEO Chuu Yong)

本研究では、日本語のアスペクトに焦点を当て、事象全体の telicity を算出するために、動詞と内項位置の裸名詞(句)がどのように相互作用するかを考察する。

具体的には、「ビルは一分間で／一分間パンを食べた」と「ビルは半年間で／??半年間家を建てた」のような非対称性を探るべく、動詞・裸名詞の組み合わせによる telicity の解釈を考察し、その解釈が曖昧になるかどうかは、動詞の語彙的意味に内在終了点が含まれているかどうかによって決められることを提案する。つまり、日本語の裸名詞と共起する動詞に終了点が内在する場合は、文全体に telic の解釈が与えられることになる。一方、終了点が内在しない動詞の場合は、

解釈が曖昧なままになる。そのため、事象全体に終了点を与えるほかの要素が導入されない限り、文が一通り以上の解釈が可能になる。

#### [H-5]

##### 日本語語彙的複合動詞の生産性と二つの動詞の意味関係

由本 陽子

日本語の「動詞+動詞」型（以下 V1+V2）の語彙的複合動詞（cf. 影山(1993)）に関する先行研究は、その容認性に関わる制約についての議論にとどまっていたが、実際には意味合成のパターンによって生産性にかなり差異がある。本発表では、まず語彙部門での複合語形成の本質に立ち返り、この生産性の違いの要因を説明する。また、調査結果に基づき、原義に方向性や位置関係が含まれる動詞を V2 とするものの生産性が高く「補助動詞化」している場合が多いという事実を指摘し、その理由を説明する分析を提案する。分析の形式化は、生成語彙論が提案しているクオリア構造を含む語彙意味記述によって行い、「補助動詞化」とは、これらの V2 の意味が、空間から時間軸上や属性描写の抽象的尺度上へ拡張すると共に、V1 との意味合成においてタイプ強制を起こす、あるいは、V1 と補文関係で合成されるようになるということであると主張する。

#### [H-6]

##### フレームに基づく日本語の V+V 型複合動詞の意味形成

陳奕廷

本発表はフレーム意味論(Fillmore 1982, Goldberg 2010, *inter alia*)に基づき、日本語の V+V 型語彙的複合動詞の全体の意味は前項動詞 V1 と後項動詞 V2 の「意味フレーム」に基づいて解釈されると主張する。従来、日本語の語彙的複合動詞は主に影山 (1993, 1996) や由本 (2005, 2008, 2011) などによって、語彙概念構造(LCS)の合成として分析されてきた。しかし、複合動詞の意味形成を説明するには豊富な「百科事典的知識」を含む意味構造が必要である。本発表は従来の分析で用いられてきた「項」の代わりに、より粒度の高い意味要素である、動詞の意味フレームにおける「フレーム要素」という概念を分析のツールとして取り入れる必要があることを示す。

語の意味に「百科事典的知識」を含めるかどうかに関しては研究者の間で意見が分かれている(cf. Taylor 1996, Jackendoff 1996)。本発表は複合動詞の意味形成における様々な問題点を検討することによって、動詞の意味には従来考えられていたよりも遥かに豊かな知識が含まれていることを明らかにする。

#### [H-7]

##### 「V テイク」の意味と派生について

日高俊夫, 新井文人

複雑述語「V テイク」の理論的記述を目標とする。先行研究は、V テクルとの対象を踏まえつつ、本動詞の意味と関連付けて論じている(森田(1968), 今仁(1990)他)が、理論的研究は比較的少なく、中谷(2008)が「空が曇っていく」のような例で、「曇る」「て」「いく」を構成的に合成して意味記述することを試みている。その際、イクを本動詞イクと同じ語彙エントリーとし、STRECH 関数を用いて分析している。本発表では、本動詞「行く」(イク A)と「(学校に走って)行く」(イク B), 「( (\*学校に) 公園で遊んで) 行く」(イク C), 「(水が凍って)いく」(イク D)のように多義語として扱いつつも、特質構造を利用した意味派生を提案する。それによって STRECH 関数等を用いずに、意味的な選択制限を含めて自然な形で意味合成を形式化でき、よりひろいデータを説明できることを示したい。

## << ワークショップ Workshops >> (2012年11月25日)

【A会場】

[W-1]

### 脳波から観た言語理解研究

企画・司会：坂本勉 コメンテーター：諏訪園秀吾

文献データの収集、未知の言語の記述、母語話者の直観などの従来のデータ利用法に加えて、近年は心理言語学的なデータ収集が盛んになってきた。最近は特に、脳波の一種である事象関連電位 (event-related potentials; ERPs) を利用して理論的・実証的な研究が行われている。その結果、様々な言語処理活動に対応するいくつかの ERP 成分が明らかになりつつある。例えば、意味的処理には N400、統語的な処理には P600 が生じるとされている。本ワークショップにおいては、まず、こうした ERP 成分がどのような性質を持っており、それらが言語理解とどのようにかかわっているのかを検討する。こうした基本的な相関関係を概観した後に、具体的に日本語の文理解プロセスにおいて、どのような処理を反映して、どのような ERP 成分が観察されたのかを報告する。こうしたデータに基づき、言語理解研究に対して脳波を用いた研究がどのような貢献をなしているのかを議論する。

### 脳の言語情報処理を診断する—ERP で観る否定極性項目の認可

備瀬優

ある言語刺激に対してどのような ERP が現れるかを見ることによって、その言語刺激がどのように処理されるかを検討する、という方法が可能である。このように、脳活動の電氣的パターンから言語処理の様態を判別できるという点は、言語理解研究における ERP の魅力のひとつである。そのような診断的方法のケーススタディとして、否定極性項目 (Negative Polarity Item; NPI) の認可の問題を取り上げる。例えば、「太郎は漫画しか読まない」に対して、「\*太郎は漫画しか読む」は非文となる。NPI の認可は、理論的には、統語的な位置づけを与えられることも意味的な位置づけを与えられることもある。他方、オンラインの言語理解において、NPI の認可が統語的処理であるのか意味的処理であるのか、という問題については詳しい検討がなされていない。ここでは、日本語の助詞シカに関わる ERP 実験の結果を報告する。

### 言語要素の統合に関わる ERP 成分「P600」

安永大地

線的/構造的に隣接しない要素同士を統合する際に増大する処理負荷を反映して P600 成分が観察されるという実験結果が英語やドイツ語などで報告されている。典型的な例としては、文頭に移動した wh 語とそれが解釈される位置にある空範疇との間の統合処理を反映して P600 が観察されるという報告がある。日本語を対象とした実験でも同様の成分が観察されるという結果を報告する。特に、先行研究で紹介された顕在的要素 (wh 語) と潜在的要素 (空範疇) との間の統合だけでなく、顕在的要素同士の統合でも同様の成分が観察される場合があるという事実を紹介する。具体的には「大学生が3冊コンビニで雑誌を買った。」のような数量詞とそれが修飾する名詞句の間の関係を決定する際の P600 成分を報告する。そして、このような研究の成果を踏まえて、P600 成分が反映する言語情報処理過程には少なくとも2種類あるという考えについて議論する。

大石 衡 聴

これまでの研究により、言語のある側面の処理負荷に敏感な ERP 成分が存在することが明らかにされている（例えば、上で述べられているように、意味的側面の処理負荷には N400、統語的側面の処理負荷には P600 など）。このことは、理論的に区別される各レベルの言語情報が、脳内で独立して処理されていることを示す強力な証拠と考えられている。しかしながら、各レベルの言語情報がオンラインでの言語理解の際に、いつ、どのように相互作用しあうのかという問題については、これまでほとんど検討されていなかった。ところが近年、各レベルの言語情報間の相互作用についての体系的な研究が盛んになってきており、オンライン言語理解が従来考えられてきたよりもダイナミックな認知的処理であることが示唆されてきている。ここでは、そのような一連の研究を紹介することを通して、言語理解研究に対して ERP を用いた研究がどのような貢献をなすうるのかを議論する。

【D 会場】

[W-2]

オノマトペと言語理論：統語と意味の接点から

企画者・司会者：秋 田 喜 美

Hamano (1986/1998) および Kita (1997) 以降、オノマトペの理論言語学的関心が高まりを見せている。その関心の大部分は、那須(2002)の音韻研究や Tsujimura (2005), Kageyama (2007), Toratani (2007) の意味・統語研究のように、オノマトペと一般語の共通性に向けられてきた。音象徴的・形態的逸脱性の記述が殆どであった国内外オノマトペ研究の背景を踏まえると、これは重大な分野の進展と言える。しかし、オノマトペの一般的特性が一般理論で扱えるのはいわば当然の帰結であり、その特異な面（オノマトペがオノマトペたる所以）まで捉えられて初めて、真の理論的貢献が可能となると思われる。本ワークショップの目的は、オノマトペの統語的・意味的特異性に正面から向き合うことで、オノマトペ研究から一般言語理論への積極的貢献という新たな道を探ることにある。

オノマトペの形態統語的実現に関するフレーム意味論的一般化

秋 田 喜 美

オノマトペの意味と形態統語的実現の関係については、類像性 (Akita 2009) や頻度 (Dingemanse 2011) に基づく通言語的一般化が存在する。本論では、「事象フレームの中核を表すオノマトペは『～する』等の述語として生起でき、周辺要素を表すオノマトペは節の周辺や外部に生起できる」という代替案を提出する。例えば、「けろけろ (\*する)」が写すのは、発声行為自体ではなく鳴き声である。「とぼとぼ (\*する)」は歩調という事象の一部に注目するが、「ぶらぶら (する)」は歩行行為全体を描く。「わくわく (する)」は内的経験自体を描く。以上の描写特性は名詞修飾テストで確認できる (けろけろという声/\*行為; とぼとぼという足取り/\*行為; ぶらぶらという行為; わくわくという経験)。豊富な意味内容を持ち文法範疇を跨ぐオノマトペだからこそ、フレーム内部の詳細と形式との関係を論じる格好の題材となるわけである。

オノマトペの語彙的特異性と項構造の拡張

本論は、オノマトペを伴う動詞の項構造の拡張に関して、強制による説明を与える試みである (Jackendoff 1997, Pustejovsky 1995)。日本語は動詞の概念構造を基に項構造が拡張される動詞枠付け言語であると分類され、英語の様にサテライト要素による項構造の拡張は出来ないとされている (Talmy 2000)。しかしながら、この分類の反例となりうるオノマトペを伴う結果構文 (ぼこぼこに殴る)・経路移動構文 (駅にとぼとぼと歩く)・壁塗り構文 (ポスターで壁をべたべたに貼る) が少なからず存在する (大崎 2007, Usuki 2012)。本稿では、これらの項構造拡張に関わるオノマトペの意味的特性を指摘し、その意味的特性がそれぞれの構文成立に必要な概念を強制すると提案する。

役割指示文法における構文：日本語擬態語動詞からの一考察

虎 谷 紀世子

日本語擬態語動詞には異なる統語環境に出現可能なものがある：(1)鍋の湯がぐらぐらしてきたら肉を入れる／(2)歯がぐらぐらする／(3)歯をぐらぐらさせる。「ぐらぐらする」は(1)・(2)では自動詞、(3)では使役形をとり他動詞として機能している。また(1)では項が無生物だが、(2)では身体部位である。このような違いは、これまでに構文説 (Tsujimura 2005) と投射説 (Kageyama 2007) という立場から説明されてきた。本稿では、Van Valin (in press)の役割指示文法における議論に従い、一見相反するかのようと思われる両立場は実は相補的であり、前者は聞き手の側、後者は話し手の側から見た分析であると議論する。自動詞に関しては、構文固有の特色が見られないため構文スキーマを仮定しないが、他動詞に関しては、「させ」を伴う使役形、[副詞擬態語＋他動詞]の口語的代用形という2種の構文スキーマを仮定する。

日本語オノマトペの有声／無声の対立における音象徴と他動性

大 関 麻 衣

本論は、オノマトペが特異なものとして周辺の扱いをされてきた要因の一つとも言える音象徴が、これまで文法の中核的な現象として様々に議論されてきた構文の他動性 (Hopper & Thompson 1980 等) と体系的に関連していることを示す (太郎が怒り狂って頭を床に {ドンドン／\*トントン} と叩きつけた)。今回は、語頭子音が有声／無声で対立し尚且つ意味的にも最小対を成す日本語オノマトペを対象として、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉コーパス』で用例を検索し、その他動性を Hopper & Thompson の 10 の意味素性の観点から分析した結果を報告する。そして、これまで独立に考えられてきた音象徴と他動性という文法的特性が事態認知 (Langacker 2008) という共通の要因によって動機づけられていることを明らかにすることで、音から意味が表出するという実験心理学や音韻論における一般的な音象徴観を見直し、また、Kita (1997)によるオノマトペの異次元への位置づけに対して修正を試みる。

【E 会場】

[W-3]

スペインの諸言語における借用語

企画者・司会者：福寫教隆

スペインで用いられている主要な4言語 (スペイン語 [カスティーリャ語]、カタロニア語、ガリシア語、バスク語) における借用語に関する問題を対比的に考察する。現代世界の一般的な

傾向としての英語の影響と、スペイン国内の現象としてのカスティーリャ語の影響をとりあげる。これは平成 22～24 年度科学研究費助成事業（基盤研究（C））による研究「現代スペインの諸言語の語彙に関する対比的研究」（課題番号：22520440）の一部である。

### 「西製英語」に関する一考察

福嶋教隆

言語 A が言語 B の語彙を採り入れる際に、もとの語彙をつなぎ合わせたり、変形させたりすることがある。形式的には言語 B からの借用語らしく見えるが、実は言語 B には存在しない（或いは異なる意義を持つ）語彙が生み出されるのである。日本語にはこの種の語が非常に多く、特に英語が元になったものは「和製英語」として知られている。

スペイン語〔カスティーリャ語〕も、英語からかなりの語彙を借用している。その中には、次のように、省略により原義とは異なる意味で使用されるものが認められる。christmas [krísmas] (< Chirstimas card), tennis (< tennis shoes), 'skate' [eskéit] (< skateboard), córner [kórner] (< corner kick) 多くのスペイン語話者は、これらの形式は英語圏でも通用するものと考えているが、たとえば Christmas 1 語で「クリスマスカード」を表すことは英語では一般的とは言えない。本発表では、このタイプを「スペイン語圏製の英語」、つまり「西製英語」と呼ぶことにし、それを手がかりにスペイン語における借用の特質を探ってみたい。

### カタロニア語における英語からの借用語について

長谷川信弥

カタロニア語は、スペイン語同様、18 世紀以降に英語由来の借用語を多く取り入れるが、その経路は単純ではない。英語から直接取り入れたと考えられる例(revolver 「リボルバー」)は少なく、多くはスペイン語を介して入った(bistec 「ビーフステーキ」)と考えられる。が、そのスペイン語経由の語ですら、英語から直接入ったものではなく、フランス語を経由したもの(dandi 「ダンディー」, rosbif 「ローストビーフ」)であるといわれている。この状況は 19 世紀末まで続く。そして、19 世紀末以降になって、英語から直接入る(xec 「小切手」)が、20 世紀になるとイギリスからではなくアメリカ合衆国の英語からの借用(voleibol 「バレーボール」)が主なものとなり、21 世紀の現在に至る。本発表では、英語由来の語がいくつかの経路を経てカタロニア語へ取り込まれる経緯を、特に 20 世紀前半までの個々の例を見ながらたどり、同言語の借用語の特徴を考察する。

### ガリシア語におけるカスティーリャ語の借用: 語彙面のカステラニスモ

浅香武和

イベリア半島北西部のガリシアは、12 世紀末から 14 世紀中頃にかけてガリシア語による抒情詩がつくられ、ガリシア文学が華開いた輝かしい時代であった。しかし、15 世紀からガリシア語はカスティーリャ語の影響を受けた。カスティーリャ語の言語干渉は 500 年にわたりガリシア語に続いている。この言語干渉をカステラニスモ castelanismo と呼ぶ。最初に教会のことば、次に都市生活のことばに圧力と影響を及ぼした。カステラニスモは誤用であり、ガリシア語から排除すべきである、というのが現在の Real Academia Galega(ガリシア翰林院)の考え方である。カステラニスモは、近年の研究では、sociolectos(仲間内のことば), o novo galego urbano(都市の新ガリシア語)というような呼称を使用している。今回の発表では、語彙面に見られるカステラニスモについて 4 分類して、それらの語彙について分析し考察を加える。

バスク語アスペイティア方言における、スペイン語から借用された自動詞と se 動詞の扱いについて

バスク語アスペイティア方言においては、スペイン語の *se* 付き自動詞と *se* 無し自動詞が借用される際、その取り扱いに違いが見られる。前者は、(a)「動作主体を絶対格で表し、絶対格のみがあるときに生産的に現れる助動詞を伴う構造」に現れ易い。後者は、(b)「動作主体を能格で表し、絶対格と能格があるときに生産的に現れる助動詞を伴う構造」に現れ易い。また、*se* を用いて相互的行為や再帰的行為を表すスペイン語の動詞が借用された場合も、ほとんどが(a)の構造に現れる。一方、スペイン語起源でない動詞においては、相互的行為や再帰的行為を表すとき、(a)の構造を用いる場合と、他の構造を用いる場合があるが、相互行為は、再帰行為に比べ、(a)の構造で表されることが多い。どちらにしても、(a)の構造を用いることに関しては「スペイン語の影響」と捉えている話者も少なくない。その影響がスペイン語起源でない動詞においてどこまで及ぶかについても考察する。

## 【F 会場】

[W-4]

北ヨーロッパおよびバルト海周辺地域の諸言語における逆使役について

企画者・司会者：佐久間淳一，コメンテーター：佐々木冠

逆使役化は使役化と逆方向の派生である一方、受動化と共通の性質も持っている。また、意味の観点からは、受動化だけでなく再帰化とも関連があることが知られている(Haspelmath 2000)。しかし、その統語的な派生の過程に関しては、外項の抑制による脱他動詞化と捉える考え方(Levin & Rappaport-Hovav 1995)、再帰化の一種と見なす考え方(Chierchia 2004, Koontz-Garboden 2009)、対応する他動詞文が逆使役文の他動詞化であるとする考え方(Pesetsky 1995)、そもそも統語的な派生の過程として捉えるべきではないとする考え方(Alexiadou et al. 2006)など、さまざまな見解が提出されている。本ワークショップでは、再帰代名詞由来の派生接辞を持つアイスランド語、再帰代名詞由来の派生接辞を持ち、それによる動詞派生が生産的なリトアニア語、そして、再帰代名詞由来ではないが、再帰的な派生接辞を持ち、それによる動詞派生が生産的なフィンランド語を取り上げ、各言語の逆使役の検討から、逆使役の統語的な派生過程に関する考察に新たな論拠を提示することを目的とする。

### アイスランド語における逆使役

入江浩司

アイスランド語の動詞の自他の対応では、他動詞から自動詞を派生させるパターンが多く、その中でも再帰代名詞由来の接辞-st を付加して自動詞化するものが特に多い。この接辞をもつ動詞は、再帰、相互、身体動作、逆使役など多様な意味の広がりを見せ、独立の再帰代名詞+動詞による表現とともに、いわゆる中動相の領域を、部分的に重なりながらカバーしている。逆使役を形成する場合を除いて接辞-st に生産性はなく、-st 動詞は全般に語彙化の程度が高い。これと起源を同じくするスウェーデン語などのスカンジナビア半島のゲルマン語の動詞接辞-s は、文中で動作主を明示することも可能な受動構文を生産的に形成する手段の一つとなっているが、アイスランド語の-st 動詞では受動的な意味の場合でも動作主を明示することはできない。本発表では、アイスランド語の接辞-st による逆使役表現の位置づけを考察し、その統語的・意味的特徴を示す。

### リトアニア語における逆使役

櫻井映子

リトアニア語は、自動詞化優位の地域にありながら、使役接辞-(d)in-/(d)y-の付加による他動詞化が一定の生産性をもつ、中立型あるいは双方向型の言語である。リトアニア語の再帰代名詞由来の接辞-si-/sをもつ派生動詞は、再帰、身体動作、相互、自己利益、逆使役といった多岐にわたる意味領域をもち、いわゆる中動の Kategorie を形成している。これらの意味は、基本的に、独立の再帰代名詞+接辞-si-/sをもたない動詞によっては表されない。一方、リトアニア語では、接辞-si-/sの付加が必ずしも統語論的な自動詞化や受動化に結びつくわけではなく、この接辞をもつ派生動詞はしばしば対格目的語を取る上、動作主を明示可能な受動文は形成しない。本発表では、ロシア語など近隣の諸言語と比較しつつ、リトアニア語における逆使役の統語論的および意味論的特徴を明らかにする。考察を通じて、リトアニア語の自他交替現象を適切に解釈する為には、逆使役分析が有効であることを示す。

## フィンランド語における逆使役

佐久間淳一

フィンランド語には生産的な自動詞化接辞-UtU が存在する。この接辞は「再帰」接辞とも呼ばれ、意味的に再帰を表すが、自発など他の意味を表すことも多い。一方、統語的には、自動詞化接辞-UtU が他動詞に付加すると、他動詞文の主語は表されなくなり、対応する他動詞文の目的語が主語になる。そのため、-UtUによって自動詞化された文は、フィンランド語における人称受動文と見なされてきた。しかし、この文の主語の意味役割は主題者(theme)であり、典型的な他動詞文の目的語のような被動者ではない。また、文の機能も、目的語の主語への昇格ではなく、むしろ、動作主性および被動者性の抑制にある。このように、フィンランド語の-UtU 接辞の機能は、これまで再帰や受動との関わりで論じられることが多かったが、本発表では、-UtU 接辞の中心的な機能は逆使役であり、また、-UtU 接辞を持つ文(逆使役文)と他動詞文の間には直接的な統語的派生関係はなく、したがって、逆使役文を受動文と位置づけることはできないことを明らかにする。

### 【G 会場】

[W-5]

## アクセント・トーンの中和

企画者・司会：窪菌晴夫

音韻的な対立が失われる現象は中和(neutralization)という名前で広く知られている。とりわけ近年の音韻研究で注目されているのが特定の環境において対立が失われる不完全中和(incomplete neutralization)、位置的中和(positional neutralization)の現象である(以下、「中和」と呼ぶ)。音素(母音、子音)の場合には、どのような音韻環境・位置において対立が失われやすいか比較的によく研究されているが、アクセントやトーンの中和については実証的研究が少なく、中和のメカニズムがまだ明らかにされていない。本ワークショップはアクセントの方言差異や変化が著しい日本語諸方言についてオリジナルなデータを分析し、各方言における(i)中和の原因・起源、(ii)中和の条件、(iii)中和の実態・方向性を議論した。

## 鹿児島方言におけるアクセントの中和

窪菌晴夫

鹿児島方言は長崎方言と同様に、単語の長さとは無関係に2つのアクセント型が存在する2型アクセント体系を有する。この方言ではアクセント型の中和はこれまで報告されたことがなく、1音節語であっても「日、葉、碁、十（とお）、銃」（下降型：A型）と「火、齒、五、塔、十（じゅう）」（中平型：B型）の区別がある。また複合語では伝統的な複合法則によって最初の形態素のアクセント型が継承され、長い複合語であってもアクセントの区別が失われることはない。しかしながら発表者の近年の調査によると、(i)人の名前を呼ぶときの呼びかけイントネーション、(ii)若年層における1音節1モーラ語、(iii)若年層における長い複合語、以上の3つの環境・状況でアクセント型の中和が起こっていることが明らかとなった。本発表では、おもに(i)と(ii)の現象に焦点をあてて、鹿児島方言のアクセント中和現象を分析した。

## 長崎方言におけるアクセントの中和

松浦年男

長崎方言は語内にピッチの急下降を含むA型と、含まないB型という2つの型を持つ二型アクセント方言のひとつである。この方言の複合語は、鹿児島方言と同様、前部要素の型が複合語全体の型になる。

[ハ]ー(A)→ハ[ザ]クラ（葉桜，A），[ユ]キ(A)→ユ[キ]マツリ（雪祭り，A）

ネ=(B)→ネグサリ（根腐り，B），サル=(B)→サルムシ=(猿虫，B)

ただし、鹿児島方言とは異なり、前部要素が3モーラ以上になると、前部要素の型がA型であっても複合語全体はB型になることも指摘されている。

ギ[タ]ー(A)→ギターブ=（ギター部，B），イワシ(A)→イワシツリ=（イワシ釣り，B）

この観察に対して、本発表では、複合語の中和現象は複合名詞の場合には観察されるが、複合動詞の場合には観察されないことを指摘した。

ハ[タ]ラク(A)→ハ[タ]ラクハジメル（働き始める，A），ハタラクバチ=（働き蜂，B）

## アクセントの式の中和—中央式アクセントと垂井式アクセントの中間アクセント—

新田哲夫・中井幸比古

中央式アクセントは「核」と「H式・L式」という文節全体にかかる「式」という音韻特徴をもつ。垂井式アクセントには種々のタイプがあるが、歴史的には中央式アクセントから発生し、「式」の対立が消失したという共通点がある。本発表では、中央式と垂井式の性質の異なる中間アクセント、(a)京都府京丹波町と(b)福井県敦賀市周辺の各方言を取り上げる。これらの中間アクセントを見ることによって、(1)式の中和の起こる環境、(2)式の中和の方向性、(3)式対立の消失プロセスについて述べた。結論は以下のとおり。(1)式の中和は、(a)では句中で、(b)では句頭で起きる。(2)L式の特徴が変化してH式に合流する。(3)式対立の消失は、(b)の状態から、L式の「上昇性」の特徴が無くなり、句中で「低接性」が残るというプロセスを経たと推定する。一方(a)の状態は、接触により新しく発生したタイプと推定する。この推定は世代別調査、地理的分布からも支持されることを述べた。

【H会場】

[W-6]

現代形態理論と日本語の活用における諸問題: 音便・不規則形・迂言的活用

現代の理論的な（屈折）形態論研究では様々なモデルが提案されており、各モデルを特徴付ける主な観点としては、1) 形態素基盤（morpheme-based）であるか語/パラダイム基盤（word/paradigm-based）であるか、2) 語幹や接辞などの要素1つ1つが形態統語的・意味的素性を持つと考える増分的（incremental）アプローチであるか語幹や接辞は語が持つ素性の具現形（exponent）と考える具現的（realizational）アプローチであるか、3) 形態論と統語論を独立した部門と考えるか（lexicalism）、連続体を成すものとするか（anti-lexicalism）といったものがある。本ワークショップでは、上記三点についての組み合わせが様々な異なる複数の形態論のモデル、具体的には、分散形態論（Distributed Morphology）、IPモデルとしての寺村活用論、ワードグラマー（Word Grammar）、語彙機能文法（Lexical Functional Grammar: LFG）による、日本語の不規則活用、音便、時制接辞、迂言的活用などの諸現象に対する分析を提示し、現代の形態理論研究における主要な論点について整理・比較・検討を行う。

#### 分散形態論による現代日本語の不規則活用の分析：形態統語環境と異形態

田川拓海

分散形態論を用いた現代日本語（共通語）の活用の分析において、不規則な活用がどのように分析できるのか、形態規則の整備と異形態の取り扱いを中心に論じる。具体的には、いわゆる変格活用（「する」「来る」）についてはともに子音語幹動詞と考え、母音語幹動詞に近い振る舞いをする活用形（終止形、假定形）は語幹に母音を付加する再調整規則（readjustment rule）によって実現されると主張する。さらに、環境によって個別の振る舞いをする活用形の分析に対して後期挿入（late insertion）が有用であることを示す。たとえば、「する」は「べき」の前という環境では「すべき」という活用形が可能になり、「見る」は共通語では連用形命令法（「見（い）」）を許さないが、補助動詞の場合は可能となる（「書いてみ（≡書いてみろ）」）。このような現象は統語計算の後に活用の音形が決まると考える分散形態論では無理の無い分析が可能となる。

#### 寺村秀夫による活用表の再考—「タ系語尾」の位置づけについて

大島デイヴィッド義和

寺村(1982)は、構造主義者 Bloch による日本語活用論を基盤として動詞に10種の活用形を認める活用表を提案している。寺村による厳密な形式的基準に基づく活用形の認定は、客観性・一貫性に優れ、その後の形態論における進展を考えても輝きを失わないものといえる。寺村の活用論におけるひとつの争点は、「テ」「タ」「タラ」「タリ」といった形式（「タ系語尾」）を含む形式の取りあつかいである。寺村はこれらを直接語幹に後接する屈折接辞とみなす（例えば「書いて」の場合、基底系を [kak/+te/] とする）が、歴史的にみればこれらは元来連用形に後接する要素（助詞など）であり、現代語でもこの構造（[[kak/+i]/+te/]）を保っているという分析も十分に可能である（Martin 1967 など）。本発表では、「タ系語尾」を含む形式とそれ以外の形式が許すアクセント型を比較し、音韻的な根拠に基づいて「タ系語尾」は語幹ではなく連用形に後接する要素であることを論じる。

#### 膠着型言語の屈折形態論と Word Grammar

吉村 大樹

Word Grammar (WG) における形態論は、ある語がどのような最終的な語形を有するかがあらかじめ決められるという点でパラダイム的、かつ具現的である。一方トルコ語や日本語のような

いわゆる膠着型言語では、上述の屈折形態論的説明と同時に統語構造を含む迂言的な現象としても説明されるべき例が見られる。本発表ではその一例として、現代日本語における「行って」「飛んだ」などのいわゆるテ形、タ形のうち「テ」「タ」の部分を屈折接辞とみなすのではなく、統語論上は語幹部分と「テ」「タ」の部分という、独立した2つの要素が存在していると主張する。その一方で、形態論上では語として認定された「テ」（または「タ」）と直前の語幹部分とが融合して1つの語形を形成していると主張する。WGはこの形態・統語の2つのレベルでのミスマッチを矛盾なく説明でき、またいわゆる「連用形」形式の形態・統語論的説明とも説明上の一貫性を保持できる。

#### 迂言的活用形から見る日本語動詞形態のパラダイム基盤分析

乙黒 亮

日本語は膠着的な形態的特質により語の内部構造の透明性が高く、一見すると推論的なパラダイム基盤による活用形の分析は妥当性が低いように思われる。しかし本発表では、近年のWPモデルにおいて広く採用されている迂言的活用形を含め日本語動詞活用を包括的に見ることで、その分析にはパラダイム基盤のアプローチが必要であることを示す。具体的には、<丁寧>、<否定>の素性が過去時制において具現化される際、「食べないでいました」、「食べませんでした」、「食べていませんでした」のように本動詞、助動詞、コピュラを含む迂言的な活用形が義務的になると論ずる。また、これらが形態的なパラディグマティックな関係において規定されることを、統語的に構成される「食べたのです」、「食べないでいたのです」といった表現と対比させながら示し、語彙主義に基づく語彙機能文法において、迂言的活用形を含んだパラダイムの形式化を試みる。

#### <<ポスター発表 Poster presentations >> (2012年11月25日)

【共通講義棟 206 号室】

[P-1]

東村山市方言の複合動詞のアクセント

高山林太郎

発表者は、東京都東村山市各町の農家の男性7名を対象に、複合動詞リスト等の読み上げによるアクセント調査を実施し、次の2点を確認した。1つ目は、『新明解日本語アクセント辞典』付録 p.55 に「強めの意をもつ結合動詞は、前部動詞のアクセントを生かす傾向がある」とある現象に関連し、前部動詞の-②の位置に下げ核がある（または単に頭高型の）場合、複合動詞の表わす動作は文字通り真剣に行われるが、-①の位置にある場合、真剣さが弱い。2つ目は特殊拍についてで、「エ」などは勿論のこと「ワ」も特殊拍となり、話者によっては「ヤ・ユ・ヨ」もそうなるが、単独や「だ」の付く形で言い切る場合は下げ核が左に移動しにくく、文中で用いられる場合は移動しやすい。従って、例えば多摩湖町の話者では、「住み替える」「掻き回す」「食べ終わる」「問い合わせ」の4語について、無核または1, 2, 3, 4拍目に下げ核があるアクセントが可能である。

[P-2]

日本語とアイヌ語の受動構文に見られる働きかけの種類に関する一考察

FREGUJA fulvio

本論の目的は、認知類型論の観点から日本語とアイヌ語沙流方言の受動構文における働きかけの種類に関する分析を施す事である。本稿では、通言語の普遍性と個別性の確定という問題を取り上げ、Croft (2001) の見方に立脚したい。Croft は、言語普遍性は人間の認知能力を表す「概念空間」に見られ、言語間の個別性は形式と意味の写像関係によって作られる「意味地図」の反映であるとしている。働きかけは時間と深く関係する事態の参与者間の非対称的關係であり、益岡(1987)が指摘している受動構文の種類と相関関係を表す。時間が背景化されると、働きかけの具体性の度合いが段階的に低くなり、その結果、様々な中間受動構文から構成される連続体が見られる。又、アイヌ語沙流方言の受動構文の使用範囲は日本語と比べて狭いという事が明らかになった。特に、アイヌ語沙流方言には、特定評価的な働きかけを表す受動構文と無情評価的な働きかけを表す受動構文が存在しないようである。

[P-3]

韓国語の文末形式「-kes-ita」の文法的意味の分化と分割可能性：文法化の観点から

呉守鎮・堀江 薫

韓国語の文末形式「-kes-ita」は、「現在または過去連体形 (-N)」と共起する「-N kes-ita」が「説明」、「未来連体形 (-I)」と共起する「-I kes-ita」が「推量」、というように共起する連体形語尾の種類別によって文法的意味が分化している。本発表では、「-N kes-ita」と「-I kes-ita」の文法化の相違点を「kes」と「ita」の分割可能性の観点から検討する。両形式は、(I)「kes」と「ita」に分割される場合、(II)「説明」や「推量」のモダリティ形式として一語化している場合、(III)形態素境界の有無においてゆれが見られる場合、という三つに分類でき、(II)の観点からすると、両形式ともかなり文法化が進んでいるという共通性が見られた。しかし、(I)と(III)の観点から詳細に観察すると、「説明」の「-N kes-ita」に比べて「推量」の「-I kes-ita」の方が相対的により文法化が進んでいることが示唆された。

[P-4]

現代中国語の剰余否定と語彙の関係の再検討

姚 碧玉

現代中国語の「差点」は結果から考えると、述語の否定を含意する。その意味で「差点」と否定辞「没」が共起する場合、論理的には二重否定が予測されるが、そうならないことも多い。

この現象は中国語学において「剰余否定」と呼ばれている。先行研究では任(2007)や江(2008)などが認知言語学や語構成の観点から「差点没 VP」の問題を捉えてきたが、いずれも説明的妥当性において不明な点が多い。

本発表では新たに「没差点 VP」の構造も含めて、総合的に検討し、VPの語彙レベルにおける事態の望ましさが結果事態の予測に大きく影響することを主張する。

構造と意味とのずれの原因として、述語のもつ語彙上の意味と先行文脈が考えられるが、「差点没 VP」構文の前後の文脈を操作し、調査を実施した結果、文脈依存である可能性が排除され、述語の語彙上の意味に原因があると裏付けられた。この点において朱(1959)のような語彙意味論的分析がより適切性が再評価される。

[P-5]

ベトナム語における機能辞 *củ* の特徴と条件表現の関連性

DANG THI HONG NGOC

ベトナム語の機能辞 *cứ* について、先行研究では動作・状態の継続、行動要求などの意味を表すと考えられていた。本研究ではこれらに加え、条件マーカールとしての機能を有することを提起した。ベトナム語の条件マーカールとして代表的なものに *nếu*、*hễ* がある。*cứ* はこの2種のマーカールと同様に、習慣条件表現及び仮定仮説条件表現に用いることができる。その一方で、*nếu* の生起する条件文は後件の事態が話し手の予測性の高いニュアンスを表せるのに対して、*cứ* の生起する条件文は話し手が後件の事態が繰り返されることを認識すると共に、結果の確実性について表明することを指摘する。仮設条件文は同じ結果を予報するが、*hễ* は前件が発話時点で未生起の事態であることを示すのに対して、*cứ* は過去から継続される状態であることを示す。

また、他の条件マーカールと異なり、*cứ* は規則的習慣の意味が強く、実現可能性が高いニュアンスを持つ条件文を構成できることを主張する。